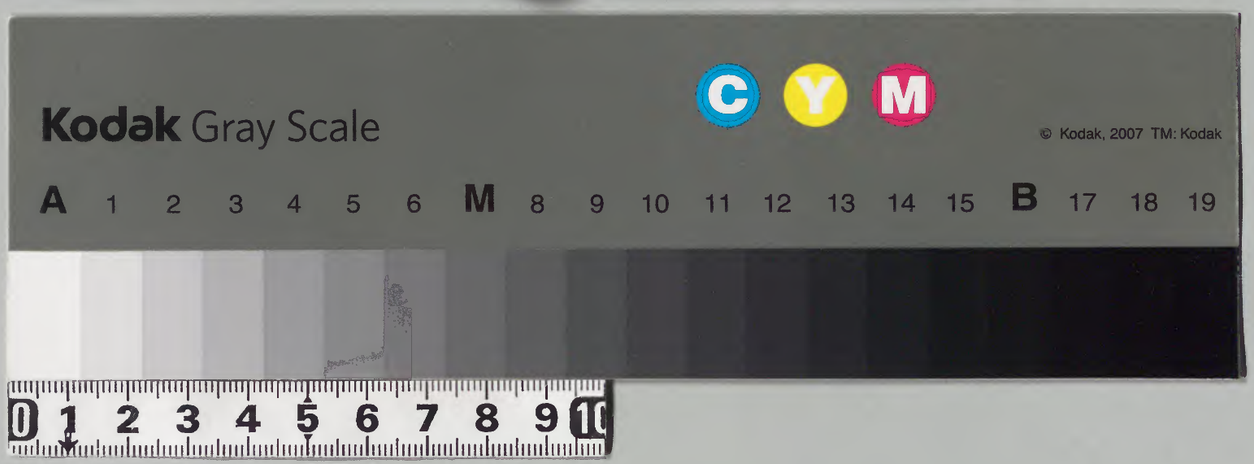
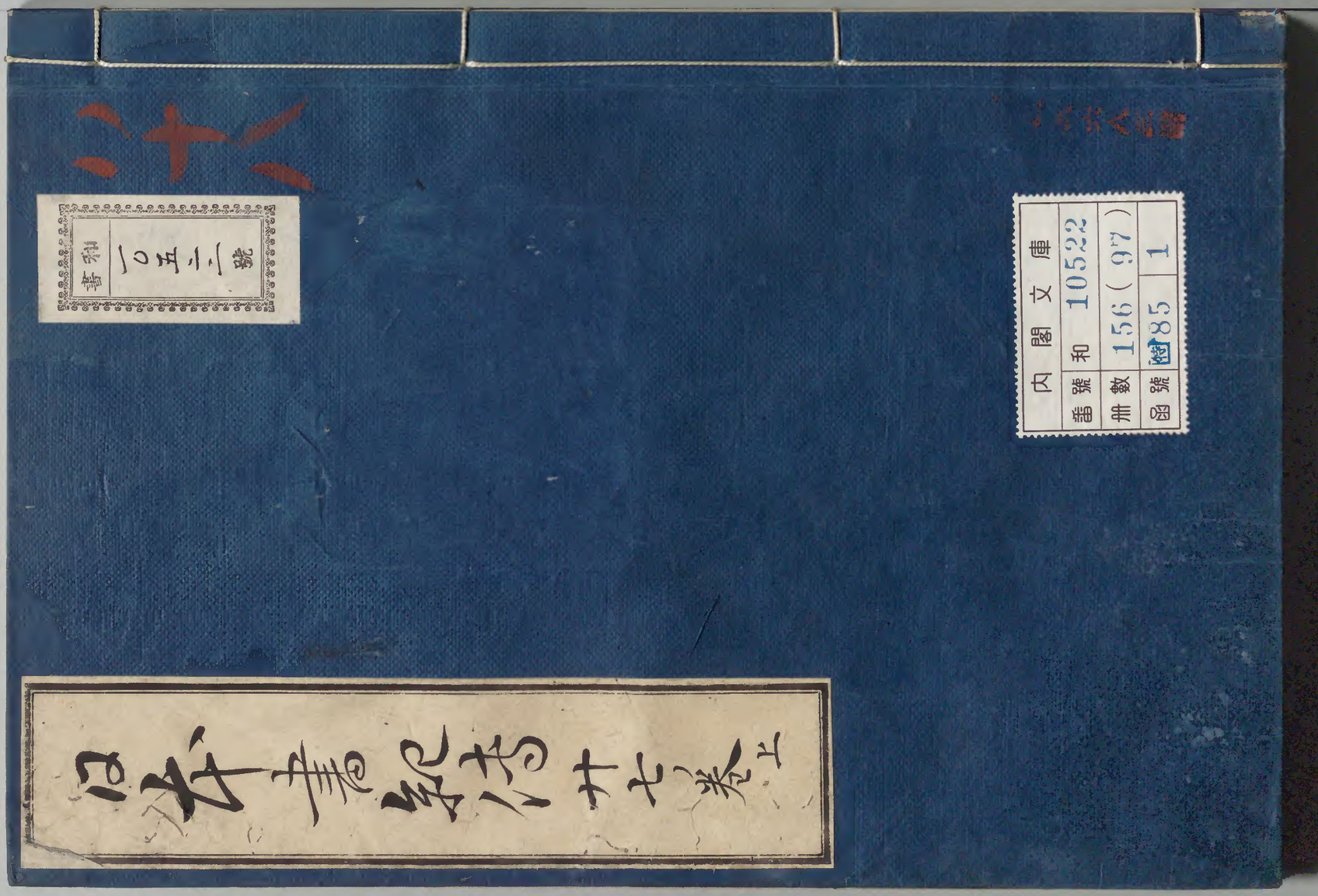


国立公文書館
National Archives of Japan



教部省文庫印
帝國文庫 消印
帝國文庫 第四

日本書紀傳二十七之卷

神代上第二十五　寶劔出現章　穗積重行　謹撰

一書曰素戔嗚尊所行無狀。故諸神科以千座置戶而遂逐之是時素戔嗚尊帥其子五十猛神降到於新羅國居

内一二六八三號

曾尸茂梨之處乃興言曰此
地吾不欲居遂以埴土作舟
乘之東渡到出雲國簸川上
所在鳥上峯時彼處有呑
人大蛇素戔嗚尊乃以天蠅
斫之劒斬彼大蛇時斬蛇尾
而刃缺即訝擘而視之尾中有
一神劒素戔嗚尊曰此不可
以吾私用也乃遣五世孫天
之菩根神上奉於天此今所

謂草薙劍矣

ユルヽクサ　ナキノ　ツルギ　ナリ○

素戔嗚大神の天降り御在ㇾ坐ㇾる事前後二度あり其先ある度ハ彼諸神ふ逐ハれ給ひて天降ㇾ坐給ひ後の度ハ日神ふ辞見(マカリマヲシ)ふ參上ㇾ坐せ御在ㇾ坐ㇾて天降ㇾ坐給へりけゝ然ㇾて其御子五十猛神を帥て天降ㇾ坐御在ㇾ坐ㇾるをバ其初の事とや爲む又後の時とや爲む今あむ定め云難ゝりけゝを此彼考合すゝか此か段ゝの次第有ゝ事共ありけり故此ふ素戔嗚尊所行無狀故諸神科(オホセ)ス千座置戸而逐ㇾ之是

素戔嗚尊帥ㇾ其子五十猛神ㇾ降到於新羅國ㇾ居曾尸茂梨之處ㇾ乃興言曰此地吾不欲居遂以埴土作ㇾ舟乘ㇾ之東渡ㇾ云云ハ其前の度の事ふ云ハ此後の事の一有を東渡到出雲國在鳥上之峯ㇾ有ハ此後の事の一有を東渡到出雲國ㇾ續きて一ふ混同(マジリ)たゝ者あり此訂正ㇾ無ㇾて見ゝ時ハ前後の事ふ就て打合ざゝ事あり多く出來めゝを然條理を分別ち見ゝ時ハ次ゝも疑ふ可ゝ所無く甚鮮明ふ見ゆゝ者ふ然ゝハ此正書ふ八岐大蛇の形狀を云ゝふ松栢生於皆上ㇾ有ゝ栢ハ即檜ある事傳二十三　百二十一下ふ注せゝが如くあゝふ古事記ふも亦其身生蘿及檜榲ㇾ見ㇾ之其檜榲ハ此ふ第五ノ一書ふ素戔嗚尊

中略乃抜鬚髯散」之即成」松又抜散胸毛是成」檜と有る是
みて此下ハ初五十猛神天降之時多將樹種而下然不
殖韓地盡以持歸遂始」自筑紫已大八洲國之内莫不播
殖而成者山焉と有ハ其同時の事ふ〳〵て松栢の生始
め檜槻の茂榮ゆる初ふ〳〵有けれバ若五十猛神の御
天降其簸川の時ふ〳〵むふハ右の第五一書の故事ハ
一も皆ぐ〳〵ふ徒事とあむ成意めるふ就て有る様有
る可一と深く遠く(此彼ふ直して)文義を考見以て行くふ此ハ必一
も先の神逐ハれの御時ふ帥て天降り御在一坐けるふ
おころ完ますたるけれ其ハ彼大蛇の背上ふ松栢の

生たるあむ恰りも青山成せる狀ある〳〵を其ハ大八洲
國内盡くふ青山成せる後ふ〳〵てバ然〳〵形貌ハ成す
可〳〵ぐる理あるが上ふ元より檜槻の樹種ふどの
無き以前あるふ然〳〵物の生べくも非ずけれバ此ふ
ハ前後の事を甚く事略て一ふ合せ傳ハれるが中古
ふ至りてハ其差別も何も知るわず成行て其と此と
ハ別物の如く(ふむ)成竟たるふころ有るし凡て上古の事實ふ
於てハ異ある一傳も有あれども其中ふハ首尾相貫
きて一ふ圓在る可き事も必有ハ其因て出る所の源
相同一けれバあむ此意忘る可〳〵ず然れバ此ふ故諸神科以千座置戸
而遂逐之是時素戔嗚尊帥其子五十猛神隆到於新羅

（神名式ニ謂リ對馬國上縣郡鳥大國魂神社ノ傳ノ素戔嗚尊新羅國曾尸茂梨ノ地ニ到給フ時先此島ニ鎮給フ」ト有リ是ナリ）

國ト有ハ甚ク事ヲ約メタル者ナリテ其始大八洲國ヲ天降リ御在シ坐シ著テ其ヨリ新羅國ニ流離ラヘ御在シ坐ケラムコトヲ四ニ已ニ明シメ註シ奉ルガ如ク寶鏡開始章第三ノ一書ニ初度ノ御天降ノ御事ヲ書セルニ既而諸神請素戔嗚尊曰汝所行甚無頼故不可住於天上亦不可居於葦原中國宜急適於底根之國乃共逐降去于時霖也素戔嗚尊結束書草以爲笠蓑而乞宿於衆神衆神曰汝是躬行濁悪而見逐譴者如何乞宿於我遂同距之是以風雨雖甚不得留休而辛苦降出于尓以來世諺著笠蓑矣

入中佗人屋内又諺負束草以入中佗人家内有火上犯此者必燔解除此太古之遺法也ト有リ此時ニ五十猛神ヲ率テ帥テ天降ラセ御在シ坐ケルアリケリ然ルニ此素戔嗚大神ハ已ニ此時天上ヨリ神逐ハラヒサセ給ヒケル御時ニ亦不可居於葦原中國ト禁制メ奉リ給ヒシ葦原中國ト云ハ傳十四ニ十一ニ注セルガ如ク高天原ニ對ヘテ此大地ノ全体ヲ云称ヘル物ナリ此程ニハ我大八洲國ヲ除テハ外蕃諸國ハ未地形モ調ヂザリケレハ當昔ハ押並テ此大八洲國ノ摠称ノ如クアリケル故ニ右ハ亦不可居於大八洲國ト云意味アル文アリ

此を以て衆神の共か距て留休め奉ふすゝて終ふ未
形生ある新羅國へハ追放ち奉ふれたる者ゝ所見た
り其證ハ降到於新羅國と有ふぐゝ下か初五十猛神
天降之時多將樹種而下然不殖韓地盡以持歸下略と有
（此特）
る歸字ハ此方より往渡ふせ給へるか非ずてハ云ま
じき言あるか眼を著て見以て行く時か實か隈無き
事ふあむ有けるゆ然れバ右の前章第三の一書の結か是
有ハ中天の事かハ非ず天上より此大八洲國か天降
り御在ふ程か處ゝか流浪ひ給ひふ間の御辛苦
あて其降と云ハ此か降到於新羅國と有か等ふくて
彼國か到り着せさせ給ふ御事を然申せるみて大凡
ハ罷ぬか近き所なめり然ふて次か乃興言曰此地吾不欲居遂以

埴土作舟楫之東渡と有ハ素戔嗚大神其御子五十猛
神を帥て彼土か御在ふ坐ふ著せさせ給へれどゝも御
心落居させ給ハざりけゝふ更か御祖國か歸渡ふせ
給ハ將ゝ所思ふ成て發憤ふせ給ひけるゆ若て此
東渡と有ハ下二十九下か明ゝめ奉るが如く此度ハ決め
て出雲國かハ御在ふ坐ふ著せさせ給ひ下か遂始自筑紫凡大
八洲國之内莫不播生而成青山焉と有るゆ此御功業ハ
ゝも御父子相共ふか成させ御在ふ坐ふける事次の一
書か著明るゆけれバ此（御功）事を千名の五百名か負持ふ
御在ふ坐ふて再天上ふハ參上ふせ給ひけるゆけり

此即四神出生章ゟ謂ゆゑ故今國内人民多以夭折後
使青山巒枯ㇾ有ㇾ御所行ゟハ引替させ御在ㇾ坐て
國土人民ゟ廣き厚き御恩頼を幸ハへ給ふ御大業ゟ
御在ㇾ坐(ゆれ)て寶ふ日神の大御心ゟ協りせ奉給ふ
御所行ゟあむ有けれバ今(ゐむ)ごとく天ゟ參向りせ給
ふ可き自然の勢ゟハ渡ㇾせ給ふ可き御事ありけれ
上章第三ノ一書ゟ是後素戔嗚尊曰諸神逐我我今當永
去如何不ㇾ與ㇾ我姊相見而擅自徑去蹔廻復扇天扇國上
詣ㇾ于天下略ㇾ有ハ先ゟ天降ㇾせ御在ㇾ坐ㇾ來ゟ引續
の事の如く見ゆゑ物ゑゝ右の大八洲國内盡ゟ青山

と瑞ゝしく成させ御在ㇾ坐ける間ゟハ何千萬年を
ゟ重ねさせ給ひけむ其ゟハ上ゟも云ゑゞ如く正書ゟ
上ㇾと云ひ古事記ゟも亦大蛇の事を云ゑゟ松栢生於皆
き年序を經ゟ仕ゟ然ゑゟも亦其身生蘿及檜槙ㇾと有も久ㇾ
とも見えさゑゟ心若てゟ事ありて一朝一夕の較略ありゟ
を潜めて辨ふ可ㇾ若て到出雲國簸川上所在鳥上之
峯ㇾと有ハ後度の御天降の御時ゟ其到ゟ著せ給へゑ
所を記されㇾ者ありて其實ハ第五ノ二書ゟ是時素
戔嗚尊下ㇾ到於安藝國ㇾ可愛之川上也ㇾと所見たゑ是
ありゟが其も此度ハ新羅國ゟ渡ゟ來坐ゑゟハ非ゞ
ゟㇾ出雲風土記ゟ意宇郡安來鄉郡家東南二十七里
一百八十歩神須佐乃烏命天壁立廻坐之尓時來坐此

處而詔吾御心者安平成詔故云安來と所見たる是即
直か天上より此處か天降り御在〳〵坐たる證ある事
已か傳二十三十四二十五九
丁丁
若て此度か日神の授させ給へり〳〵三女神ハ申すも
更あり供奉みて參上〳〵せ給へりけり五十猛神以下
の御子神等をも共か帥みて天降〳〵せ御在〳〵坐ける
故か出雲國みても其御事跡あも多在りける其ハ下
三十
一丁か註〳〵明〳〵め仕奉てむ〳〵右の如く章句を逐
て佗か此校ふる時ハ此一書ハ〳〵も素戔嗚大神其御
子五十猛神共か天降〳〵せ御在〳〵坐ける前後の御事

の混同か成れるうう〳〵其ハ差異の所見難きをおもひり又事
か過たる事もかうう〳〵されども御紀の例九て一の略
委〳〵き方か讓りて省〳〵事あり〳〵此ハ然〳〵も尤む可
き事あ〳〵ざるあり〇所行無狀ハ寶鏡開始章の首か是後素戔
嗚尊之所行也無狀何則云云と有て上か先此事を云
て下か其條目を擧〳〵れ其第二一書ありて素戔嗚尊云
〳〵と初か其犯罪の事を並べ載りれて終か凡此諸事
盡是無狀と云結めり〳〵れ第三一書ありて既而諸神嘖素
戔嗚尊曰汝所行甚無頼故不可住於天上亦不可居於
葦原中國と有て此ハ無頼の言か換て神逐の時の
語と爲るも此の所行無狀と有か趣異あ〳〵ざるあり

△逐之二字古事記ニ神夜良比夜良比岐ト訓ベシ

傳十九 十七丁 二十一 十三丁 ニ而科ス罪過於素戔嗚尊而科之以千座置戸遂促徴矣其第三ノ一書ニ即科素戔嗚尊千座置戸之解除以手爪爲吉爪棄物以足爪爲足爪棄物乃使天兒屋命掌其解除之太詔辭而宣之焉ト所見タリ此ヲ約メ云ヘル者アリ傳十九 五百六十五丁 二十二 百十丁ニ委ニ〳〵云ヘリ○遂逐之公竟鏡開始之事ニ而已竟逐降焉ト見エ其第二ノ一書ニ已而科罪於素戔嗚尊而責其祓具中略用ヒ此解除竟遂以神逐之理逐之ト書ヘル第二ノ一書ニ所ノ其ヨリモ委ニ〳〵既而諸神嘖素戔嗚尊曰汝所行甚無賴故不可住於天上亦不可居於葦原中國宜急適於底根之國乃共逐降去ト有ヲ此ノ事略レタル者アリ傳八 九十六丁 五百八十四丁 二十一 百九十八丁 二十二 百十丁見ヘヲ可ヘシ○其子ト有ヲ御祖ハヘモ決ク神皇產靈尊ノ御女ニテ渡ラセ給ヒケリ其ハ傳十九 五百九十三 二十三 十四丁 ニ已ニ明ニシメ註ヘ奉レルガ如ク舊事紀異本ニ服狹雄尊娶萬魂分姬神皇產靈尊女生兒五十猛命妹大屋媛命次抓津媛命ト有ハ異ナル傳ニテハ有レドモ萬魂分姬命ト申ス神名甚珍ラシ〳〵キニ就テ長寛勘文ヲ攷ルニ初天地本紀云伊謝那支尊(娶)惠乃女命生兒

大夜乃女命次若夜女命(王神)云是此大夜女
御神命熊野大
后坐陸上立時身体左肩忍奈豆流時成出來神名加已
川比古命又右肩忍奈豆流時成出來神名熊野大御神
加夫里支名久志弥居怒命自鬐中成出來神名須佐乃
手命三柱大王等是也此時金國之八熊野之波比降來
伊豆毛國致熊野村宮柱太知奉而加夫里支熊野大御
神地祇神皇又御兒后名大夜女命山狹村宮柱太知奉
而静坐大御神云是也と有る此く甚く以離れて異ふ
る傳ふるごと隨分(カヅカヅ)所有ある可きが此始か伊謝那
支命娶惠乃女命と云ふ信ふれぬ事あり此ハ佗神の

事ある可うむを其神名を失ひうるある可し若て
惠乃女命の惠ハ殖(之女命ノ云ふ)の言の約れるある可き事其御女
三神共ハ夜乃女命と負坐る御名ハ屋之女命(ノミコト)ある
先心を留む可し次ハ陸上立時より以下三柱大王等
是也と云以上ハ彼御稜の事を誤傳へたるかて久志
弥居怒命と須佐乃手命とを別神と爲るあり其加已
川の川字ハ都音の假字ある可て其時か生坐るある
ぬ軻遇突智命の御名を訛りたる者あるふや有む金
國之八熊野波比ハ心得ず金國ハ若くハ紀伊國ある
むを八熊野と云ハ今年屋郡熊野の地を抱て云る波

（下六十八丁小注せるが如く同郡杉梅別命神社坐る此を今來宮大明神と申して五十猛命坐るを猶此神を祀りて外にて本宮と申此彼有

比八熊野波比ゝ今訓べくざるあり又思ふに金
事を神功皇后元年御紀に金銀之國とも又は新羅の
も見え顯宗天皇元年御紀に金銀蕃國と書され武烈
天皇前紀に銀卿とも有れば彼國の事ゆゑとも所思
ゆゑども彼八熊野波比に至りて殆と其說究まりゆ
又右文の伊豆毛國を群書類聚本に伊豆國と有り
姑く此を立て見るに神名式に賀茂郡伊太氐和氣命
神社に（那智ノ誤カ）走湯山縁起を見るに祭神一者白道明
神云々二者早追權現也云々と有を其略縁起に白道
明神八柿森に鎮座して給ふ五十猛命是あり世人來宮
明神と称し奉るを今熱海郷の鎮守是あり一曰木宮又
曰紀伊宮乃是素戔嗚尊御子ありと云て五十猛
命の彼國に由有を見れば金國をば伎能久尓と訓べ
く所思ゆ然れども猶伊豆と有るを本に誤りて伊豆も
國と有るも正しきを後人の考あるべきを
便宜とも爲ばやとて我あがゝなふ異在るを思を說
を書し置く
事にあるも降來伊豆毛國と云八此一書あどに是時

素戔嗚尊帥其子五十猛神降到於新羅國中略到出雲國
簸川上所在烏上之峯と有を云あり致熊野村宮柱太
知奉而加夫里支熊野大御神と有八此第五一書に然
後素戔嗚尊居熊成峯而遂入於根國矣と有る此時に
幽宮を定奉りて神名式に意宇郡熊野坐神社名神
大と有るを是ある由傳二十三 百 丁に己に注し奉れ
るが如し次に地祇八謂ゆる天社國社の國社と申す
事あるやあや姓氏錄に素戔嗚尊の御紘を地祇部に收
くれたるに考合すべき可し神皇又御兒と有る此に決め
て脫字有て神皇產靈尊又御兒と有けむ事右に引る

異本舊事紀ふ萬魂分姫命を神皇産靈尊女と有ふ照
ー合せて其説を得ろ事あり然ろ時ハ上ふ伊謝那支
尊娶(二)憙之(一)女命と有ハ此ふ相應ハざろ事ふて神皇産
靈尊の御子ふ右の憙之女命と申すゞ御在ー坐ろ其
又御子ふ當ーせ給へるを以て御子神の又御兒と云
事ふて近く云ハゞ御孫と云むが如ー右名大夜女命
と有ハ(上ふ此大夜女命其熊野大御神(ふ)右(坐)神と申(せ)(是ある)(第五ノ書ふ)(さむ)が如ー若て彼
五十猛命妹大屋津姫命と有を以て見ろふ五十猛命
ふ大屋津彦命と申奉ろ御名御在ー坐べき筈ある(ふ)ふ
古事記ふハ其神ふ當て正ー〳〵く本國之大屋毘古神と

△地神本紀ふ五十猛神(ふ)(亦天屋彦神)次大屋姫神ふ載ー又

有て此を以て其御祖の大夜乃女命ふ申すも同ゞ御
德の神ありふて大屋之女命ある事灼然ろけれバ
萬魂分姫と此神と八同ゞ御神ふあむ渡ーせ給ふ可
ろけろ山狹村宮柱太知奉而靜坐大御神云是也と
ハ神名式ふ意宇郡山狹神社同社坐久志美氣濃神社
と有ろ此御事ふて即五十猛神の御祖神ふあむ御在
ー坐ける又其大夜乃女命ふ並びて足夜乃女命若夜
三柱神共ふ鎮り御在ー坐す御事と所見たり同社坐
久志美氣濃神社ハ熊野本宮ふも本ずり御在ー坐ろ
を此ふても其右大夜乃女命と相共ふ鎮り御在ー坐
ろありけり風土記ふハ夜麻佐社とて二所ふ出たろ
が久志美氣濃神の御名を漏せり扨ふ今云山佐村屬
能義郡而熊野村東南也と云ハ毋理郷ふ在ありけ

△此第六ノ一書ニ
五十狹ニ之小河又
汀

△開化天皇六年御
紀ノ御間城入彦
五十瓊殖天皇ヲ
古事記ニハ御真
木入日子印恵命
印恵ニ字以音ト作レ

ル〇五十猛神ノ五十ハ伊ト訓ベキヨリ例ニ天孫降
臨章ノ五十田狹之小汀ヲ古事記御(國平)天降段ニハ伊那
佐之小濱伊那佐ニ字以音ト有リ神功皇后(三九年)御紀ニ五十鈴宮
ト書タレドモ古事記御天降段ニハ伊須受能宮ト有リ
人名ニハ此第六ノ一書ノ姫蹈鞴五十鈴姫命ヲ白檮原
宮段ニハ富登多々良伊須ス岐比賣命ト有リ(出雲神天
皇元年御紀ニ活目入彦五十狹茅天皇(三十四年ニ五十日足ス入彦命ト)五十瓊敷入彦命ト云御名有ヲ
古事記ニハ印色之入日子命(印色ニ字以音)又伊賀帶日子
命ト有リ景行天皇四年御紀ニ五十狹城彦皇子五十
河媛ト有ヲ始トシテ外ニモ五十某ト有ヲ五十ハ何
レモ伊ノ一言ヲ訓ム古書ノ定格ナリ(事知ベシ)又万葉
一二十ニ丁ニ百不足五十日太尓作四四十三丁ニ眞玉付彼此
兼手言足ス五十戸常相而後社悔二破有跡五十戸六十五
丁ニ四良名美乃五十開回有住吉能濱九三十丁ニ五十
毋不宿二吾齒曽戀流十二七丁ニ五十殿寸天薄眉根干
又八丁ニ名草漏心四無者五十寸手有(目)面八面又十二丁ニ爲便
乎無美吾者五十日手寸十三四丁ニ五十串立神酒座

奉又五丁山邊乃五十師原尓又山邊乃五十師乃御井者
又二十丁留吾者伊五十狭(日下)将待ゐど有も皆ゞゝ小五
十を伊の假字か借用ひたり又十三巻二丁か百不足
本か三十を二世字か作れり又十三巻二丁か百不足
冠辞考か今本か美曽都伎と訓たれど三八五の草の
手より誤れる者明ゝゝなれば改めて伊都伎我延陀
と訓べし百不足より二十三十四十と續けゝゝ例も無
く理も無けれバあり云われたる説あて甚明ゝゝお
ある事あれバ此五十槻も右か擧たる例共ゝ等ゝゝく有
あむ者偖中臣祓注か引る大宗秘府略記か韓神者伊
猛命號韓神曽保利神と見えたる其韓神の説ハゝゝも
佗か證ある証有て傳二十六八十小注せる如くなれ
ハ其ハ別の事あゝて右か伊猛命と有あむ五十猛神

と書されたる其訓を知か足れり偖此五十八弥(神)の我
ある可く猛ハ此正書か御父大神を武素戔嗚尊と書
されたる武か同ゞくゝて瑞珠盟約章か其御本性の
御事を此則神性雄健使之然也と見え又其第六一書
か有武健陵物之意と有か似たる意味ある可ゝゝ神武
天皇戊午年御紀か八十梟帥と云ふ此彼有て梟師此
云多擯屢と注され崇神天皇六十年御紀歌か挪(八雲)
多菟(出雲)伊頭毛多鵜(梟帥)流餓(下略)と有を古事記か八日代宮段
か在て出雲建と云人名と為り其景行天皇二十八年
御紀か於是日本武尊抽(神)祠中之劒刺川上梟帥之胸未

及之死川上梟師叩頭曰且待之吾有所言時日本武尊留殺待之川上梟師啓之曰汝尊誰人也對曰吾是大足彦天皇之子也名日本童男也川上梟師亦啓之曰吾是國中之強力者也是以當時諸人不勝我之威力而無不從者吾多遏武力矣未有若皇子者是以賤劒陋口以奉尊号若聽乎曰聽之即啓曰自今以後号皇子應稱日本武皇子言訖乃通胸而殺之故至于今称曰日本武尊是其縁也と有り此事古事記にも見えて其終ふ尓其熊曾建白信然也於西方除吾二人無建強人然於大倭國益吾二人而建男者坐祁理是以獻御名自今以後應稱倭建御子下略と有り即多祁流と云事の所由ちり右等の例共を引て考るふ此五十猛神と申すハ御父大神ふ相亞て武く強き御威(枝)ちも御在ー坐す大神ふハ渡ちせ給ひける然るハ國土の初ハーも道速振る荒振神ちも多在り如可き世中ある可きめれハ然計の御威力の高く(太)御在ー坐ふ非ずーてハ大八洲國を盡く尓吉山と成ーて給ひ又御名を韓國伊太氐神とも申奉る御有功ちどハ並くの神ふーてハ得物爲させ給ふまじき御事ありを想像ひ奉る可くちむ有けり已ふ古事記ふ見えたるが如く大宍牟遲神の八十神の爲

小窘めくれさせ給へる所か尓亦其御祖命中略告其子言汝有此間者逐爲八十神所滅乃速遣於木國之大屋毘古神之御所と有も此大神の武勇を頼ミ参くせ給ふ御所爲ある御事あるを思合す可くあむ有けるに已に清原宣賢卿説も此神も父尊か似給ひて性猛く坐ますあり」と宣へり倩右か引る神武天皇御紀の鳥帥此云多稽屢と有る此字ハ通證か李久卿與藤武書斬其鳥帥註鳥帥賊之勇將と有る此を以て書れたるあれども川上鳥帥が日本武尊を然称奉れるを以て何れか尊く勇く有る謂ひて其言の別もあるかハ非ずてあむ　但右か樂たる御紀の例何れも五十と伊と訓來る事あるが唯此御名かのミ限りて伊曽と訓む習あるハ必受る所有が故あめり此か就て考るか

△の五十を伊曽き訓ミ其有功の言か當る可し仲哀天皇即八年御紀か天皇即美二年一迹手而伊蘇志故時人号平迹手之本土而伊蘇國と有る伊蘇是ふり斯れバ此

記傳十二之八丁　小神名帳か紀伊國名草郡伊太祁曽神社名神大月次相嘗新嘗　此ハ五十猛(イダケル)有功神(イサヲタケルカミ)と云れたる實か然る説ひて此か伊ハ曽と成あり採と要と云れたる實か然る説ひて此か伊曽多祁流と讀るハ有功猛神(イサヲタケルカミ)と申奉る意あるあり有功の言有て下か猛と云てハ著無きが如くあれども此ひてハ多祁流ハ高在(タケル)の義と見て明くあるべし大凡高も武も本同言あるひて共か其群を抽出たる意の言あれバ此二方か何れか心得むも更か違ひ無る可き者あるべしもし然れバ伊多祁流と云も一義伊曽多祁流と云も亦一義ひて其言ハ相近る物の

其意ハ共ニ別ナシ（ム）ト雖モ凡テ御紀ノ訓ト云物ハ何レモ古ヨリ世々ノ先達ノ家々ノ傳ヘ有ル所ノ古訓ヲ以テ訓ル者ナレバ輙ク捨ベカラザル事多シ縦ヤ此説ノ僻事アリトモ五十神ノ猛キ勇ミヲ合セタル意ヲ見ルトモ可キハ傳十九巻百八十四丁ニ注ルガ如ク彼ハ意思兼神ノ八意ハ弥意アルガ其意ハ万葉十三巻ニ物部乃八十乃心呼天地ニ念足橋ト有ル八十ノ心ヲ合セタル如キト同ジ意味アルヲ思フ可シ○帥（ヒキヰテ）八（天孫降臨章）第二一書ニ大物主神及事代主神乃合八十萬神於天高市帥（ヒキヰテ）以昇天陳其誠款之至時中略宜領（ヒキヰテ）八十萬神永爲皇孫奉護乃使還降之神武天皇御紀ニ天皇親帥（ヒキヰテ）諸皇子舟師東征ト也天皇獨與皇子手研耳命帥（ヒキヰテ）軍而進ト也親帥（ヒキヰテ）輕兵巡幸焉ト也汝宜帥（ヒキヰテ）大來目部ト也帥（ヒキヰテ）其衆而歸順焉ト也

有ル何ヲ也比伎韋氏ト訓ヤセテ引率ノ義アルカ又ハ韋氏ト訓ヤセテ海宮遊行章第七一書ノ御歌ニ和我謂祢志伊茂播和素邏珥孝徳天皇大化五年御紀歌ニ阿陀虞陛屢伊慕辛多久例珂威尓雞武ヲ多ク歌ノ詠ル是ナリ然レドモ此ハ古ヨリ皆比伎韋氏ト訓來レルカ今モ從フ可キニ○新羅國ハ仲哀天皇八年御紀ノ神託ニ譬如美女之睩有向津國睩此云麻眼交之金銀彩色多在其國是謂栲衾新羅國焉ト有ル是ナリ出雲風土紀國引文ニ栲衾志羅紀乃三埼矣國之餘ト有ル即見者國之餘有詔而童女胸鉏所取而大魚之支太衝別而波多須ニ支穗振別而三身之綱打掛而下略ト見エタリ万葉三五十四ニ栲角乃新羅國從十五五ニ多久夫須麻新羅邊伊

麻須又 二十六丁 新羅奇敝可伊敝尓可加反流ゐど所見なれバ志羅紀の紀字清て訓べきあり神名式ふ越前國敦賀郡白城神社信露貴彦神社（能登國能登郡白比古神社ふ）ど云ふ御在ー坐も其國の神ある可きおや若て神代ふ八束水臣津命の御言ふ詔給ひ仲哀天皇御世の神託ふ然詔給へる御事の御在ー坐を以て當昔已ふ其稱有ー事知るる偖又右の如く拵衾の發語を係て宣ひ拵紲の言を置て云習へるを以て志羅紀（又志理大）の言の韓語ふ八非るを曉る可ー太古ハ天地一枚の神代ふーありけれバ我が古言を以て神の号けさせ給へる事灼然くもむ右ける故是

（下六十小注ふ伊豆國加茂郡志理大ふ手置神社ど素戔嗚尊ふ坐て新羅擁護神也ど云ふ新羅招ど云事ふて彼韓招ど似たる言あるど右の志理大ハ新羅の一名ふて後方ふどふる可く白主國ふ表ふして其ふ證ふ有る國の謂ふり

（欽明天皇十六年御紀ふ神語ふ以て百濟王ふ仰下されー語ふ意ふ建邦神者天地割判之代草木言語之時自天降來造立國家之神也ど有ふ以て知べーふ斯ける

を以て考るふ志羅紀ハ退城（シリキ）の言ふありけり然るハ此巻首ふ已ふ云るが如く素戔嗚大神其始高天原ふり諸神ふ神逐させ御在ー坐て此大八洲國ふ天降ーせ御在ー坐けれども國内の諸神同ーく共ふ距ぎて留休め奉らぢかりしが後竟ふ韓地の方へ流離ーへ往渡ーせ給へる趣ある事此一書の末ふ歸字有を以て推察ふわたり又此大神を建邦之神ど申ー立十握神ふ韓國伊太氐神ど申す御在ー坐す上ハ彼土ふ都ー給へる其間ふも此も甚久ーふ事ど聞ゆれバ志羅紀ハ退城（シリキ）ふて此大神（の當昔此ふ潛ミ御在ー坐けるふ起ける國名ありけるー若て又

△此下ハ韓地ノ云ヒ傳ヘ

此擬ひハ百濟（クダラ）ハ降在高麗（コマ）ハ隱身（コモリシ）ありどの言あるより
むを何れも韓語以て唱へ僻めるかくう有ゆめ次の
一書ハ素戔嗚尊韓鄕之島云々と有を以て此二神の
事跡三韓ハ共ハ一旦ハ事を明しむる時ハ自然ハ著明
りありむ纂疏ハ新羅國者三韓之地と注させ給へる
も其御心ありめり又口訣ハ云ヒ文を載て次ハ今按佛家者託
時現躬神以三井勸請（清瀧ハ赤山ハ並ビテ）入唐
新羅明神素戔嗚尊也（ハ新羅明
珍自唐還時老翁現于舟中曰我是新羅國之神也珍仮
朝以爲三井寺鎭守（ハ三井寺鎭守也僧圓
言神明以証國俗然ト部家不察之遂附會謂右三神者
皆是素戔嗚尊所變也不可不可正焉ト云ヒ但上ハ引たる
ハ白城神社又信露貴彦神社ありど共ハ新羅明神と同
じく素戔嗚尊ト所思しけれバ右の圓珍が事ハ別ハ

△此正書ニ一書ありども共ハ久陀理多麻布ト訓ミ又

して此大神とも申しつるより若て右の
三韓ハ東國通鑑ハ馬韓百濟辰韓。新羅（斯盧）辰韓高麗ト云
ふ是ありて其即韓語ありり此を以て右ハ注せる志羅紀
久陀良古麻の言の我が古言ありるを知べし通證ハ北
史曰新羅者其先本辰韓種也辰韓始有六國後稍分爲
十二新羅則其一也又曰文字甲其同於中國風俗刑政
衣服與高麗百濟同每（毎）月旦相賀王設宴會其六日拜（ヲガム）日月
神南史曰無文字刻木爲信（符）百濟與後通焉ト有り

〇降到（クダリツキテ）公天孫降臨章ハ二神於是降到出雲國五十田狹之小汀ト有ども降到を
狹之小汀其第一ノ一書ハ二神降到出雲第二ノ一書ハも
既而二神降到出雲五十田狹之小汀（右ハ到字を書れたる所詮無ク似たり）
阿麻久陀理麻志氐ト訓ハ然ラを古事記御天降（クダリツキテ）段ハ
於是天若日子降到（クダリツキテ）其國（ト）云云故尓鳴女自天降到（クダリツキテ）居天
日子之門湯津楓上ト云ヒ是以二神降到（クダリツキテ）出雲國伊那佐

之小濵ど也有を記傳ふ久陀理都伎毛と訓れたるが
實ふ到字ふかを入て然もむ讀附ふれたるみて尤も
と所思ゆれバ此も其意を得べき所ありて此ふ
字を離ちて見ふ時ハ四神出生章第十六一書ふ月夜
見尊受勅而降已到于保食神許と有が如くして此ふ
ふも降字ハ上ふ故諸神科以千座置戸而遂逐之と有
より兼て天上より降ふ御在ゝ坐ふ御事を申ゝ到字
ハ下ふ東渡到出雲國簸川上云云と有ふ等ゝくして
其往著せさせ給ふ御行方を申せるみて其ハ傳十二
三百
十丁二十三四
丁ふ明らめ奉れる如く其始天上ふり

先皇原中國ふ天降ふり坐せさせ給ひ其ふり新羅國ふ到り著
て其意を深く味ふ可き所ありて且又此正書
ふ降到於出雲國簸之川上と云ひ第一一書ふ下到於
安藝國可愛之川上也ふど有も九て天降ふ坐す事と
其降坐て後ふ到著せさせ給
ふ御事とを合せ云ふ者あり〇曾尸茂梨之處ハ口訣
ふ荒芒地猶云籠完之空國と云ひ篶疏ふハ在新羅之
地名と注させ給ひ或説ふハ新羅國之邑名と云れど
も今詳ふざるあり故思ふ曾尸ハ此大神の御名
の素戔嗚尊ふ言ふるを韓語ふ例の訛れるみてるハ有け
め出雲風土記ふ飯石郡須佐鄉郡家正西一十九里神

須佐能袁命詔此國者雖小國ニ處在故我御名者非著
ニ木石一詔而即已命之御魂鎮置給之處故即大須佐田小
須佐田定給故云須佐即有正倉ト云事迹モ有ケ
レバ此大神彼新羅國ヲ到給ヒ其宮敷テ御在ケ坐ケ
ル處ナルカ依テ其地カ号ケテ大御名ヲ遺ケ傳ヘサ
セ給ヘケムト所思メ若テ此茂利ハ(森ヲテ此ニ其大神ノ帥テ
御在ケ坐ケル五十猛神ノ天上ヨリ持下ラセ給ヘリ
ケル樹種ヲ韓間此地ニ殖サセ給ヒケム故カ然云ヘル
有ベカラムケリ天武天皇元年御紀カ高市社所居名事
代主神万葉ニ三十ノ六丁カ哭澤之神社ニ三輪須恵七三十ノ三丁

(せ給へケムを)

カ眞鳥住ケル名手之神社(モリ)之九十ノ六丁カ山科乃石田社(モリ)ニ
又二十ノ一丁名ニ負有社ニ風祭爲祭十ノ八丁カ鸎之來居而應
鳴森ニ早祭礼十二ノ三丁カ山代石田杜(又ハ丁ニ眞鳥住ケル名手之杜之神思將御知)十三ノ六丁カ山科之
石田之森之須賣神ニ奴左取向而ゾ神社(モリ)ニモ社(モリ)ト
杜(モリ)トモ森(モリ)トモ書ケル是ヲ古今俳諧カ願言ヲ然ノミ
聞ケム社(ハシテ)ニコソ竟ハ歎キ敷キノ杜ト成ラメ風雅雜中カ年
深キ杜ノ梢ヲ神佐備テ木(コ)闇キ杜ハ宮居ナリケリ」フ
ド神ハ多ク叢樹ノ中カ宮居ヲ定メテ鎮坐ス者ナレ
バ即神社又社ノ字ヲ茂梨トハ訓セタル者ナリ又古
書カ多ク神名備ト云モ神並ヲテ杜ヲ云ケルナリ戰國策ト

云ふ漢籍亦聞恒有神叢興と有ふ注亦灌木中有神靈托之索隠云高誘注云神祠叢樹也と云ふハ我が茂梨を云ふあり但右の十巻ふあどハ説文亦森木多貌と云亦同じく木の多く生茂りて材の如く成れる也之と有ふ是あり和名抄亦説文云平地有叢木曰林和名八久ル林も森も平地亦叢木有を云ふが神の坐を茂梨と云事古今共亦異ふず故此曽尸茂梨坐さふを林と云事古今共亦異ふず故此曽尸茂梨の事亦就て度會延佳説亦按和名抄高麗樂曲有蘇志摩利疑其地風俗之歌曲乎と云ひ通證亦見林曰高麗載在仁智要録今按曽閲其舞圖著蓑笠以屈折盖摸素尊流離辛苦之體也と云ふハ然ふ説ゆて西大寺資財流記帳高麗樂具の中亦蘇志摩利縣笠二蓋各白維衣と有ふ縣字ハ通用ゆて懸笠ふ～むと先亦ハ思ひ一りど也猶字の仕亦縣笠ゆて田舎人の用ふる下品の笠と云意ふる可く白羅衣と云も甚く襤褸一ゆ御有狀を摸し象れる者と所見なり此等の事を思ふも此大神の五十猛神を帥て彼土亦降給ひ後亦有ずまじき者ふりけりの御天降の度ふるゆて上章第三一書亦乃其逐降也云ふ干時霖也素戔嗚尊結束吉草以爲笠蓑而乞宿於衆神衆神曰汝是躬行濁悪而見逐譴者如何乞宿於我逐同距之是以風雨雖甚不得留休辛苦降矣と有ふ時の御事ふるを辨亦可く亦有ける又和名抄高麗樂曲の

中ふ狛鉾古萬埴破波ホと云有も我が昔所思ゆる称
保古 和利
ふるみ狛鉾をバ体源抜ふ俗名軌挌舞古より傳云高麗人舟ふ
乗て來りふ其中ふ棹を以て舞ひ者有り其形を象
りて作りあり」と云ふ此ふ以埴土作舟乗」之東渡
と有を摸せるみてもも又べく埴破ふ其埴(舟枕す)を取せ給へ
る状を象れるかも有べきを思ふ可くあむ偖此の曽
尸茂梨を樂ふ蘇志摩利と云ふハ音の轉れるあり若
て和名抄ふ志岐傳と云有を体源抄ふ一説此曲又名
廻庭樂と所見たるハ蘇志摩利の一名ありて志岐
傳ハ醜(シキ)手みて大神の辛苦ふ給へる状を以て云称ふ

ろふどみや又傳二十六巻九十一丁ふ注せるが如く
破陣樂を昔欒川神海を渡りて新羅國を破らせ給ひ
し形を象れるあり」と有ふ体源抄ふ道調曲の散手破陣樂一名王皇
子大物主神ふ御在しし坐せバ後ふ彼國を言向させ給
へる形の樂家ふ傳ハ欒川神ハ素戔嗚大神の御
限らず神代の遺音の猶彼ふ傳ハれるありけり斯れバ此一二ふ
傳ハ物ふらずと見め　〇興言曰ハ己ふ四神出
生章第六一書ふ見えて傳十三百十ふ注せるが如く
事ふ當りて悽愴(イタム)の御言を宣ひ擧させ給へるを云ふ
ふ然るハ此大神天上ふて諸神ふ千座置戸の祓具を
徴りめさせ給ひ己ふ神逐ひふ逐ハれて天降り御在
りし坐けるふ國内の衆神共ふ距ぎて留休め奉らざり
しかハ新羅國ふ流離ひ御在りし坐ー著せ給ひて曽尸

茂梨の地ゟ假ゟて御殿を定め御在〻坐つゝむを
其
此解除ゟ依て此時の御心ゟも甚善ハ〻〳〵物爲給ひ
て傳二十二 百 十 丁 二十三 百八十 八丁 ゟ已ゟ注せるが如
く此大神の然善ハ〻も〳〵御心ゟ立復らせ御在〻坐て
ハ御父母二柱神ゟ事依され奉給へる此國土を建さ
せ御在〻坐て其日神と共ゟ誓約の御仲間ゟ成〻奉ら
せ給へる天神御子の所知看む此大八洲國を善成〻
奉らせ給ハもと思ちゝ成らさせ給ひ旦ハ御祖神
の御國ゟゝらゝ還渡らせ給ハ將欲〻所思〻坐ゟ更
ゟ此御興言ハ御在〻坐けるゟあり猶信此興言の事ハ
傳十八 巻二十三 丁

二十三巻二百二十二丁ゟも注ゟ引ゟ各其言ハ同ど、
ちがゝら其上下の語ゟ就て心を得べき者ゟありゝ〻
○此地吾不欲居の此地ハ上ゟ降到於新羅國ハ有を
兼たるゟあり吾不欲居ハ彼國を建させ給へれども居
給ふ事を願ハ〻〳〵ら〳〵ず所思せるゟて此ハ其住給ふ
可き地を更ゟ覓さ世給ハもとあり此ハ上章第三ノ一
書ゟあゝ諸神の神逐の語ゟ汝所行無頼故不可住於天
上亦不可居於葦原中國と申せり〻不可居の語ゟ對
へたゝ御興言ゟめゟ然ゟハ先ゟハ其御行狀の無狀
うかゝゟが故ゟ天上ゟハ住べら〳〵ず葦原中國ゟハ居
べら〳〵ずと掟定ら〳〵れ〻を以て天上ゟり天降らせ給

ひても葦原中國ゟハ居〻せ給ハすして新羅國ゟハ
流離ハれさせ御在〻坐て彼地ゟ住著せ給へりし
ども彼解除ゟ依て其御心の清〻明〻ゟふ御在〻坐
〻成〻せ給へる上ハ其逐ひ奉わる天上の諸神ゟも
其距ぎ奉わる國土の衆神ゟも何の憚〻せ給ふ御事
ゟハ御在〻坐む是を以て葦原中國ゟハ還ゟ住ハせ
御在〻坐むと所思〻成〻せ給へる御言擧あら可き
御事即上ゟ興言曰と有を以て伺ひ知べき者ありう
〻然れバ此ハ吾不欲（此地欲居於葦原中國）と云意味
の文ゟ見る可き事云ゟ更ゟあり又彼上章第三一書曰
ある〻ゟ不可居於葦原中國と有〻事の諸此（地吾
照應ある〻事を忘る可らざるゟあり不欲居）と有

ゟ就て又思ふ可き事ゟも有ける然るゟハ此大神を〻
ゟ欽明天皇十六年御紀百濟王ゟ仰下されし語ゟ建
邦之神と見え五十猛神をしも神名式ゟハ韓國伊太
氐神と有て共ゟ彼國ゟ始て外蕃諸國を造立させ
御在〻坐〻神等ある〻を此地吾不欲居と詔給ひて還
住給ハ將く所思〻成〻せ給ひて己ゟ此御事御
在〻坐より始奉わりて大已貴次彦名二神の如きも彼
外國ゟ渡り御在〻坐〻ゟど〻ゟ文徳天皇實録ゟ我是
大奈毋知次大奈比古命也昔造此國訖去往東海令爲濟
民吏亦來歸と有る如く大地の皆〻共ゟ我が皇神

等此大御國ゟ渡り御在ー坐て盡くゟ造給ひ立給ふ
と雖も彼地ゟ御身を留め給ハずーて還來坐ゟハ實
ゟ此皇大御國ハーも皇神の愛くーき國と齊ひ給へ
ゟ御國ゟるが故ゟる古事記ゟ所見たゟ阿加流比賣
神の將行吾祖之國即竊乘ゟ舩逃渡來留于難波と有
て吾祖之國とーて暮ひ還坐ゟど此一二の迹を以て
も此皇大御國ハーも高天原ゟ亞てハ八百万千萬神
の神積ゟ御在ー坐ゟ神域ゟる事を知べーー神功皇后
御紀ゟる新羅王の言ゟ吾聞東有神國謂日本と云ひ
三代實錄ゟる告文ゟ我朝ゟ神國止惶良礼來留故實ゟ

有ゟど皆彼ゟ稱舉たゟ稱号ゟる八實ゟ諾ゟる事
ゟゟむ有けゟ古徵書ゟ載たゟ河圖括地象又淮南子
神州日晨土と云ひ正東楊州日申土と云ゟ申土ハ神
土ゟーて神國と云ゟ異ゟるざゟハ共ゟ皇大御國の
事を云ゟめて彼ゟ神州又神土と尊称ゟるゟ是即
大地万國を造立させ給へりーー皇神等の本土ふゟを
以ゟる然ゟを唱へ我ゟ近頃僻ーき漢梵蘭の學者共出來り
彼ゟ美を語りて妄ゟ良民を過ちて輩の
多く出て彼を羨ひ仰ぎて父母の如くゟ慕ゟめゟハ
我ゟ皇神等の御所置ゟハ甚く乖きて其罪甚ーき者
ゟる御所ゟ御謨を得奉りて國を失ゟひ家を
亡ぶす事とも得知ざゟハ憐れむ可く又
惡む可き者ゟる不欲居ハ袁良麻久冨理世受詔給比
ゟるーー
氏ゟと訓べーー神功皇后元年御紀ゟ於是天照太神誨之
曰我之荒魂不可近皇后當居御心廣田國中略亦稚日女

尊論之曰吾欲居活田長峽國（中略）亦表筒男中筒男底筒
男三神論之曰吾和魂冝居大津濱中倉之長峽便因着
往來舩於是隨神教以鎮坐焉と有て此三の居字を合
せて下か鎮坐と書れたり（是例ふ）次か欲字ハ（富斯又富理須）
と常か訓む事ありて希求る義ありて齊明天皇七年御紀
皇太子御歌か枳（君）瀇我梅（目）能（欲）姑衰之枳（故）阿羅你（泊）婆底（居）威
底。阿（加）矩（此）野姑（將）悲（戀）武謀枳（君）瀇我梅（目）弘報（欲）梨と有て姑衰之枳
又姑悲武謀など云（言）か對へて報梨と置せ給へるを以
て其意を味ふか可くあむ万葉一（十一）か吾欲之野島
波見世追（三十一）丁お欲爲物者酒西有良師（十一七）丁か千

早振神持在命誰爲長欲爲十二（二十九）丁か相見欲爲者從
君毛吾曾益而十四（九）丁か可久大尓久尓乃登保可婆
奈我目保里勢年十六（十四）丁か敬追良布君尓依而曾長
欲爲など有ら是なり又略きてハ欲字を富志と訓む
事常なり然れバ此の「不欲居を
衰良麻富斯加良受と訓も悪う〳〵然れども本か
衰良麻富理世自の訓か定む可なり論語子罕篇の子欲居九夷の欲居
を古き訓か衰良麻久富理世受と有（古つれバなり）
○以埴土作舟と有ら埴土の事ハ傳九（三十五十か
注り偖此埴土を以て作らせ給へらハ謂ゆる磐舟の
類と所見なり和名抄高麗樂曲の中か埴破波尓和利と云
有六若くハ此大神の埴舟を作らせ御在ゝ坐ゆる形

を摸せるか八非るかや其床(名)しきか就て體源抄を見
か大神紗秋云此を登玉爲と云ふ土みて作り玉五
を持て舞ふ舞人額ふの時膝の上か鞆繪を書た
る玉其所か在り後かひ吹て此を破ると云ふと云ふ
ハ舟を作りおびおハ似てしも非ぬ事ふ〻此大神
の埴土を破りせ給ひて(其)御舟を作りせ御在ー坐け
る御事の御在ー坐りふ其埴破と云ふ名のこを取て
文どめる樂などめるこ、有つゝめ然るか或書ふ引
る皷川記か素戔嗚神時ー新羅か通給ひて我倭國ふ
附ふとて新羅の埴土を領巾ふ包ー持來りて此國の

島一を築ふ造り給ふ今の佐伯の邊是ふり」ー云ふハ此
のー埴土作舟ー云事をハ信りひ難て彼崇神天皇十
年御紀か武埴安彦之妻吾田媛密來之取倭香山土裹
領巾頭祈曰是倭國之物實則反之(物實此云望能志呂)と有る此
事を取掠めて作れる者ふンめサ柳此大神かしゝ御父
大神か滄海原潮之八百重を事依され奉給ひしりバ
大地万國の大君主宰りて渡しせ給へれバ彼國を建
て我が藩屏國とハ成り給ひけめども(後)彼世ふ謀反る
者の如く彼を纂りせ給ふ如き状けき事を如何ふ物
爲させ給りむ其ハ云ふ足ぬ事ふありけり然れども

彼國の餘有る所の土を取て一島を築らせ給ふ如き
御政ハ本より御在坐つゝむ事國引坐神と稱奉れ
るみても著き事あり佐伯ハ今豐後國
如く此度の東渡ハ筑紫國と思しけれど若くハ其埴
舟を其地か居て一島を築らせ給ふ根基とも爲させ
給へかけむ古傳の有けむが亡て然る領巾の埴土の
事か訛りて云成しけるあどみそう通證ゐ引る後漢
東土舩從漢水至鹽陽と有ハ陶物と聞ゆれが此埴舟
か近きみや然るみ谷蠡遠が以埴土作舟謂下以藥土塗
舟也と云を載たるハ甚と心狹く固陋しきハ説みて云
も足ずあむ口訣のみ以埴土作舟者神異と有が

如く凡庸の臆見を以て如何ハ測知り奉る事の有む
唯古傳の仕ゐ心得む外ハ無き者ゞらゝ又土金包和
の説を成一土克水の事を云か至りてハ愈以て取べきゐ非ず〇葉之東渡より直ゐ
到出雲國簸川上所在鳥上之峯へ文の續く所あれど
も此巻首か已か論定めなるが如く必此間ゐ其頃の
事迹の文の有つゝむを亡ひたりけるあゝ其ハ
此下か初五十猛神天降之時多將樹種而下然不殖韓
地盡以持歸遂始自筑紫凡大八洲國之内莫不播殖而
成青山焉と有ゐ引合せ見ても知るゝ事あり其ハ右
ゐ始自筑紫と云と此か到出雲國と有と必其事の打
合ずゝてハ得有まじりけるあり此を強て助け

て云時ハ素戔嗚大神ハ出雲國ふ到ラせ給ひ五十猛神ハ筑紫の方ふ渡ラせ給へりと爲む𤍠然れども此首ふ素戔嗚尊帥其子五十猛神と有ふ叶ハざる事ハ云ふ更ふあり又此次ふ呑人大蛇の事も正書ふ松栢生於背上と云ひ古事記ふも其身生蘰及檜榲と有ふ此物共ハ次の一書ふ所見たる如く此素戔嗚大神の毛髮より成出たれバ所の物ふて此ふ五十猛神の盡ふ播殖て大八洲國を青山と成ラ竟給へる後の物ふ(見允第五一書ふ凡此三神云ふ即奉渡於紀伊國也と)

ろを若此ふ直ふ出雲國ふ到坐ル云時ハ彼大蛇を退治させ給へるより以前の事と爲む𤍠以後の事と爲む𤍠以前の事と爲むる事相乖へるを如何ゐとゝ爲む若其以前の事ふ(さゝ)の背上ふ在ラ統青山成(ぜ)ふ至ラ近幾千万年をゞ此ふ經させ給へりけるとゝ云む若其以後ふ置く時ハ未其毛髮より化出ざりしと云ふ謂れ無きを如何とゝの云ふ疑無きところ氣疎き事ふハ有けれ故是を以て云時ハ此東渡ルと云ハ下文ふ所見たる如く韓地より筑紫ふ渡り御在ル坐て東方紀伊國ふ始て到著せさせ御在ル坐ける事已ふ傳二十二 二百九十二丁 二十三五丁 あどふ云ラが如くふて次の一書ふ素戔嗚尊曰韓鄕之島是有金銀若使吾兒所御之國不有浮寶者未是佳也乃拔鬚髯散之即成杉又拔散胸毛是成檜尻毛是成柀眉毛是成櫲樟已而定其

當用中略天須敞八十木種皆能播生又有八此ヵ仇大八洲國之内莫不播殖而成青山焉又有一時の御事ヵ爲て此二柱神共ふ先ヵ天降ゝせ御在ゝ坐けゐ程の御政事是ゐ此ヵ絶ヵ上章第三一書ヵ是後素戔嗚尊曰諸神逐我我今當永去如何不與我姊相見而擅自徑去歟迺復扇天扇國上詣天時中略於是素戔嗚尊白日神曰吾所以更昇來者衆神處我以根國今當就去若不與姊相見終不能忍離故實以清心復上來耳今則奉覲已訖當隨衆神之意自此永歸根國矣詣姊照臨天國自可平安且吾以清心所生兒等亦奉於姊已而復還降焉

と有ゝ此文ゐ爲て先ヵ天上ゟ逐ハれて葦原中國ヵ天降給ひ又國内の衆神ゐ距ゞれて新羅國ゐ到著せさせ給ひ彼曽尸茂梨の處ヵ御在ゝ坐て彼邦を建させ御在ゝ坐ゝうども本ゟ清心ゐ立復ゝせ給へる後ゐハ彼土ヵ御在ゝ坐べきゐ非ゞれ更ヵ御興言ゝ爲て東方筑紫ヵ歸渡ゝせ御在ゝ坐て大八洲國を盡ふ青山と成給ひ其敞ふ可き八十木種を播殖給ひ殊ヵ吾兒所御之國と詔給ひて先ヵ日神と共ヵ生奉ゝせ給へかゝ天神御子の御爲ヵ外國ゟを歸せ奉給ふ可き御事共をも御心足ひヵ成ゝ掟させ給ひて其御

有功をもむ千名の五百名ゟ負持せさせ御在ㇾ坐て
今度ハ實ゟ永ㇾ御辭見を申させ給ひ先ゟ生坐ゟ五
男神をバ奉ㇾらせ給ひ三女神をバ賜ゟて出雲國ゟ天
降ㇾせ給へゟ前度後度の御次序甚分明ㇾ御事ゟ
ゟけれバ是を以て此ゟ無之東渡と云ㇾ以下ゟ右
等の事實を約たゟ傳の有つゝむを如何ゟてゟ脫
たゟㇾ者ゟめりとハ我心を定めて云事ゟて有ゟけ
ゟ此前後二度の御天降の事ゟ深く心を留めて見奉
ゟ明ㇾめざゟ時ハ此大神の比類無き御有功の御
在ㇾ坐けゟ御事も何も隱れ竟ゟのㇾあるす彼敷川
上ゟての御事ふも此彼の齟齬ひ有て其正實の眞義
を明ㇾめ得ゟ事ゟむ甚難ゟを古ゟ皆先達の聲
ゟ吠ゟ輩のㇾ多くㇾて原文の明ㇾめ無きハ如何ゟ

ゟや所思ゟ事ふゟむ ○到出雲國敷川上所在鳥上之峯と有ゟ
此御事ハㇾも已ゟ傳二十三 十二 二十五 九 丁 丁 ゟぐゟ辨
へ又上件ゟも云ゟが如く此大神の後度ゟ天降ゟ御
在ㇾ坐けゟ時ゟゟて右ゟ遂以埴土作舟葉之東渡
と有ゟ連接ゟ所ゟらず若て此度ハ御(本ゟ)伴仕奉給へ
ゟ五十猛神以下の神等ゟ更ゟゟ日神ゟ授奉ㇾらせ
給へゟ三女神をも相攜へ御在ㇾ坐て高天原ゟ直
ゟ出雲の方を指て天降ㇾせ御在ㇾ坐けゟゟゟけゟ
然ゟども其も敷川上ゟ始て天降ゟ著せ給へゟゟハ
非ずㇾて此第二ゟ一書ゟ是時素戔嗚尊下到於安藝國

可愛之川上也と有る是なり出雲風土記に意宇郡安
來郷郡家東南二十七里一百八十歩神須佐乃烏命天
壁立廻坐之尓時來坐此處而詔吾御心者安平成詔故
云安來と有る是あり但右に謂ゆる可愛之川と風土
記の長江山と云より流る伯
太川と云る是にて長江山烏上山ハ其間合甚しも隔
らざりけると見ゆれハ敷川の川上にも相近き者と
かけれ○烏上之峯ハ古事記にハ鳥髪地と書れ
記傳九十七ノ地名の下に之地と云例ハ須賀地又書
紀に曾尸茂梨之處と有りハ是登許呂と訓へき證あり
と有が如一備此峯字を多氣と訓む事ハ天孫降臨章
に日向襲之高千穗峯其第一ノ一書に筑紫日向高千穗

槵觸之峯第二一書に日向槵日高千穗之峯第四ノ一書
に日向襲之高千穗槵日二上峯第六ノ一書に日向襲之
高千穗添山峯と有る峯字何れも多氣と訓ミる事古事
記に竺紫日向之高千穗之久士布流多氣自レ久以下六字以音
有に合ひ應神天皇二十六年御紀の峯字も其訓ありし
て美祢と訓るハ景行天皇十八年御紀に其山峯曲重
疊と有る所のミなり(皇極天皇三年御紀に嶺字をも多氣と訓り)雄略天皇四年御紀大御歌に
野麻(倭)等能(小室)磐能鳴武羅(小室)能陀(峯)該尓。古事記同段に美延斯怒能(眞土野)。
袁牟(小室)漏賀多氣(峯)尓又肥前風土記に阿羅(雹)礼符縷(降。拆島)者資麼
加多(峯)壇(嶮岨)嶋(嵯峨)峨紫弥(石略)と有る此歌万葉三十ノ三十九丁に八

霞零吉志美我高嶺乎險跡と有り五二十五丁ゟ許能多氣
仁比倒布利家良之七五ゟ巻目之由槻我高尓雲居立
有良志又弓月高雲立渡十三二十ゟ三吉野之御金高
尓あど有り和名抄ゟ嶽高山名也又作岳訓與丘未詳
漢語抄云美太介と有り釋名ゟ山大而高曰嵩嵩疎也ゟ
高稲也と有ゟ我が多氣と云ハ高の稲ある合り又
同抄ゟ峯和名三祢又用二下二字一峯音夆嶺音領山尖高
處也と云り然れども峯又嶺字を多氣ゟ通ハし用ひ
たり一事上の例の如し元亨釋書五巻皇慶傳ゟ上嶽
也兒曰何有小竹子と右ハ兒ハ皇慶爲兒童初上二嶽岳一
也と云ふ細注有て其問答ある合が山嶽と竹と言相同ゟ

く上を清て唱ふ可き證是ある鳥上也峯の事八傳二十三十八
五六丁ゟ已ゟ注せるが先其所在を此ゟ簸川上云
丁ゟ記傳九十六ゟ出雲風土記ゟ出雲郡
鳥上山流仁多郡横田村郎經横田三處三澤布勢等四
郷出大原郡堺引沼村郎經來次斐伊屋代神原等四郷
出出雲郡堺多義村經河内出雲二郷北流更折西流郎
經伊努杵築二郷入神門水海此則所謂斐伊河下也中略
自河口至河上横田村之間五郡百姓便河而居出雲神門飯石
仁多大原郡又仁多郡室原川源出郡家東南卅五里鳥上山
北流所謂斐伊大河上也又同郡横田川源出郡家東南

卅六里室原山北流此則斐伊大河上と有て鳥上山室
原山を水源として流下る大河是あり記傳九十七か
鳥髪地ハ彼風土記か仁多郡鳥上山郡家東南卅五里（下ニ有テ下ニ
伯耆與出雲之堺有鹽味蔕と云ふ細書有り此山今俗
ふハ舩通山と云ふ此山の東か室原山有り其間を越
れバ伯耆國日野郡か至るとぐ」取意と有り偖此國の地
圖か據て考るか其鳥上山より艮東北方か長江山と
云有て其間甚しも遠うぬが謂ゆる伯太川の水源
ふして安藝國可愛之河上と云る是あれバ此大神の
御天降坐し地ハ其鳥上山と長江山との間あり故か

一ふハ簸川上と傳りより一ふハ可愛之川上とも傳ハ
りしふて異處ふハ非りしふも有へし故地神本紀か
ハ安藝國可愛之河上在鳥上峯と八云るふめり偖鳥
云る地名ハ此大神の大蛇を退治させ御在し坐ける
ふ依りふて捉神山と云事ありやや此第二ノ一書か
其大蛇ふ勅して汝是可畏之神と詔給へりし御事見
え又古書ふ殺す事を登流と云事も有れバあり偖又
傳二十六巻十九丁ふ云るが如く簸疏ふ此第三ノ一書
ふ其斬蛇之地則出雲簸之川上山是也と有ふ就て所
斬之蛇化之也上云蛇両腸有山蓋即此山子と注させ
給へるハ實ふ尤ありけり御説ありを思合す可く
ふ〇呑人大蛇ハ正書ふ往時吾兒有八箇之女毎年爲
ム八岐大蛇所呑今此又童旦臨被呑第二ノ一書ふ我生兒
雖多毎生輒有八岐大蛇來呑不得一存今吾旦産恐亦

見呑と有る事を切めて云ある傳二十三 六十 三丁 か注り

○天蠅斫之劔 公正書か十握劔と有り第二の一書か其か斷蛇之劔號曰蛇之麁正と見え第三の一書か蛇韓鋤之劔と云ひ古語拾遺もか天十握劔其名天羽羽斬と有て如此く其傳ニ小依て名の別あるが故か各別物の如く所思ゆる物り〳〵必然〳〵も非る事已か傳二十三百四十二丁 か注せるが今も此を摠云時ハ十握劔と云ハ其度量を以て云称あり天十握劔あど云ふ天ハ天上より摧ク御在〳〵坐けるか御物の謂あり蛇之麁正と云ハ然る妖蛇を正〳〵退治させ給へるか依れる称ふか蛇韓鋤之劔と八其形容を以て号たる者あり天羽羽斬の事ハ次か云べし〳〵天蠅斫之劔と八其稱号を云ある傳此蠅ハ和名抄か蠅和名波閇胆和名波閇乃古蠅子也と有る是ある其ハ釋述義か私記曰問蠅斫之号其義如何答師説此劔尤利劔也若居其刃上者即其蠅自斫此鋭鋒之甚也と有ハ實か然る言ある而て天孫降臨章か蠅聲邪神(サバヘナスアシキカミ)其第六の一書か書者如五月蠅而沸騰之允恭天皇十四年御紀か焱起蠅散(サバヘアトリサワグ)ありと見え万葉三 五十 九丁か五月蠅成驟騒舎人者五 三十 九丁か五月蠅奈周佐和久兒等あど有て如此く騒がしき物の譬か

○三十六 五

○私記か安刀乃波倍支里乃津留支と訓り此を

○肥前風土記か纒向日代宮天皇行幸之時御宿此郷西萬御膳之時蠅甚多鳴其聲大賀島天皇勅云蠅聲甚賀島因曰賀嶋郷と云事も有り又

云事古の常あるハ世か飛虫ハ一も多く有れども蝿
許(ばかり)す飛交ふ事の交利ありて一所か落著く事無く
て手かも掠得ざる事の難き物ありけるを居ふさりて斫(きり)断つ程(ほど)な
(ヲ)利劔あるが故か蝿斫とハ云るありけり箕疏かゝ
謂蒼蝿止于劔上(下)其蝿自斬而已吹毛之類也と注させ
給へるハ右の私記の古説か據せ給へる者ありむ然
を口訣か蝿邪神之称と云るハ右の天孫降臨之章の譬
ありて説を成せるあれども非あり又蝿ハ波閇あり
を羽ニの轉ありと云るも如き説ハ未其委しきを至りさるあり
劔と有て下か其名天羽羽斬今在石上神宮古語拾遺か天十握
謂之羽羽言斷蛇也と書されわるハ右の蝿斫とハ同

又天速(ハヤ)之劔(ツルキ)云も別(コト)ニの名ありやあや春(ハル)深山路弘(ヒロ)三年(トセ)二月八日下(シタ)ツ熟田忌(ユデノイミ)昔日本武(ヤマトタケル)尊東(アヅマ)ニ平給(タヒ)ヒ時夷野(ヒナノ)ニ火を掛て尊を焼殺(ヤキコロ)さむとし鳥(トリ)ひ柱木燎(ハシラキモエ)て倒(タヲ)れなりけるか田中の水熱(アツ)くありなりしより熱田と云ふ其時天(アマ)の叢雲(ムラクモ)夜切(ヨキリ)の劔(ツルキ)ニて草(クサ)を薙(ナギ)て道(ミチ)給(タヒ)ひしかば其劔を草薙劔(クサナギノツルキ)と申き云ふ有ハ此天蝿斫之劔と云事の轉(ウツ)れるにや思ひしかども限(カギ)りなき夜(ヨ)言の通(カヨ)ふ可(ベ)く非(アラ)ハ猶天速(アマノハヤ)切之劔と云ふ一名の別か在(アル)ふりなり

しるしぞるあり和名抄か蛇和名信美一云久知奈波
日本紀私記云辛呂知毒虫也と云ひ蛇加良須倍三
又蚰蛇和名仁之木倍三蛇文如連錢也と有る倍美ハ
這身(ハフミ)と云義あるを可く久知奈波の口縄と云事あて口
有て縄の如く打延たるを稱ふ可し又通證か河内國
澁川郡有蛇草村見平氏太子傳と有ハ蛇か波と云言
の本より有うむが右の倍美の倍か同じく轉して波
も倍も共ニか這(ハフ)字の義ありを大蛇謂之羽羽と云るハ
小ふるを波と云る對か大あるをハ波波とハ云ふる
みて小蛇ハ其行く事の速あるぞるを大あるハ其

か信ーて這行く事の甚ーき謂を以て羽羽とハ云けゐ
ゐあゐ可ー或人の和名抄書入を見ゐ同抄ゐ蝮蛇一
名蠎蝀一名反鼻蝮和名波美俗或呼蛇爲反鼻其音忄
尾と有ゐ下ゐ又其太子傳を引て蛇草村今現有之蛇
訓波波美之略也波美食之義鑿人故予忄尾疑閇美之
轉非反鼻甲斐國巨麻郡有速見信見可訓波美云信見者
音通也亦十二支中巳蛇也訓美閇美之略也と云り右
みて波美ハ食ゐ信美ハ其音通ゐ由ゐが今も
蛇と蝮と其物異ゐー有けれバ蝮ハ食の義ゐ有
べー蛇を波と云ゐハ這みて其物の作用を取ゐ事疑
ひ無ゐ可ゞ者ありゐー然けれバ此天羽羽斬ハ天大蛇
斬の義ゐ事みて第二一書第三一書ゐ謂ゆ斷蛇
之劍と云ゐ實ゐ異ゐざゐ者ありけり記傳十卷三
十六丁ゐ云く弊美と云ハ反鼻字音ゟ出たゐの疑有め可け
れども其蝮條ゐ俗或呼蛇爲反鼻其音忄尾と云ゐ
右の和名信美と有とハ似たれども別ありハ聞ゆ反
鼻ハ本ゟ正名ゐ非ず一名ありを其音を取て和名
と爲べきゐ非ず其も上代此御國ゐ無ゐー者ありバ
漢一名あどをも取て名くゐ例此彼有れども蛇ありど
ハ神代ゟ有ゐ物ありバ名も無ゐ可きゐ非ず若ゃ
呂知を古名と爲むゐ可きゐ然ゐ名有ゐ上ハ更ゐ漢
一名を借求む可き由無ー其上弊美と云名ハ廣く云
習ハーたゐ名也狀ゐ聞ゆゐをや然れバ此ハ反鼻の
音ゃ自然似たゐの名也狀ゐ聞ゆゐをや然れバ此ハ反鼻の
くありけり〇斬蛇尾と唯尾のごを斬ー給
へゐあゝず正書ゐ寸斬其蛇至尾と云ゃ第二一書ゐ

至斬尾時と見え第三の一書の斬頭斬腰其斬尾と有か合せて其文意を暁る可し○又欽八正書及第二第三一書共に劔又欽と有を古事記の御刀之刃毀と有と此のくハ火字無し其訓の從ひて波迦祁伎と訓べき事云も更あり○擘而ハ私記の津牟左支久と有り字鏡集名義抄共に其訓有り又同抄の和加都とも佐久とも都牟とも比良久とも比伎佐久とも有れバ此都牟佐久ハ擘割(サキ)て正書の謂ゆる寸斬(ヅタ〳〵ニ)と同じ義ちめり○尾中ハ第二の一書ゟも劔在尾中と見ゆ傳二十五 三十ウ 云り○有一神劔を一ッ能阿夜志伎劔と訓り

此ハ正書ゟ故割裂(サキ)其尾視之中有一劔(中略)素戔嗚尊曰是神劔也と有を切めて書れたる者あり此神劔を云ふ事委〳〵くハ傳二十三 百九十二十六 十九ウ 八ウ 小注〳〵九ウ 〇素戔嗚尊曰此不可以私用也ハ下ある上奉於天へ係る所あて正書ゟ素戔嗚尊曰是神劔也吾何敢私以安乎乃上獻於天神也と有ゟ同ト義(此大神の今しハ文ゟ)ありて天照太神の御爲ゟ(ニ)獻(タテマツル)ゟも檀恣(ホシヰマヽ)ある私曲の御心御在〳〵坐ざる御事を見奉り明〳〵め知べき所ある事已ゟ傳二十二 三百 二十三 二百ゟ注〳〵奉るが如〳〵偖此私用の用字ハ所持(モチヰル)字の義ゟ見べきもあり熱田縁起ゟ何

敢私祕藏乎と有（以て考ふ可き）（是ふ）ふ乃ち以平國時所杖之廣矛授二神曰吾以此矛卒有治功一天孫若用此矛治國者必當平安と有（て是ふ）て已が物と爲て自由（ココロノマヽ）に使用（ツカフ）を云ふ此ハ大已貴神の御自常の用ひさせ御在し坐けるを御矛を國避の御時ふ當りて天孫ふ奉らせ給ひけるハ此ハ古事記ふ在都牟苅之大刀故取此大刀思異物而白上於天照大御神也と有が如く此神劔の靈威を神異しく所思し坐て御自私の物ふして使用はせ給はず奉らせ給ひけるふて豫め皇太神の御許ふ置せ給ひて天孫ふ天璽ととして授賜へらむ御所置を仰奉らせ給ふ御心ふ御在し坐けむ御事上章第三ノ一書ふ吾以清心所生兒等亦奉於御と申させ給へる御言の御在し坐ふ合せて思量ふ奉るに可ま、御事ありしし若て其奉らせ給へる御劔即皇孫寧ふ此顯國を事依し授奉らせ給ふ御璽と成れる所由ふ其ハ傳二十三卷二百十一丁ふ明らめ奉れらバ其所ふ就て幽深き致ふも有るを考ふ可し〇五世孫（イツヽギノヒコ）ハ此第二ノ一書ふ六世孫ふ當ふ在ど第二ノ一書ふ六世孫ふ有る共ふ伊都用牟都用と訓る其も悪くハ非れども猶繼體天皇前紀ふ五世孫七世孫と云事の有を伊都ふ岐那ふ都岐と訓るふ何れも從ふ可きふあり若て都具と云ハ父子相兼る事ふ云事

今も俗小嬙子を用都岐と云ふ是あり顯宗天皇前紀
小弘計王億計王の御名を爲させ給へる事を書して
乃詣京師求迎二王白髮天皇聞喜命咨歎曰朕無子也
可以爲嗣(スメミマト)と有ふ是即子(嬙)の事を嗣と云あり繼体天皇
前紀小方今絕無繼嗣(ミツギ)天下何所繫心と有ふ繼嗣を美
都岐と訓ミ又其元年小非拔庭之親無以繼其跃(ミフギヲ)等と云
事も見えたり續紀第一詔小高天原尓事始而遠天皇
御世中今至麻呂尓天皇御子之阿礼坐年弥継ニ尓大八
島國將知次止と有を鈴屋大人の解小弥継ニ尓ハ又
継又継ぎ継行あれとそ云れ第二詔小始今而次ニ被賜

將往と有を解小次ニハ子孫の嗣ニありと有り万葉
一二十九丁小須賣神乃嗣而賜流吾莫勿國久尓六四十二丁小
阿礼將座御子之嗣継天下所知座跡十八二十三丁小此山
能伊夜都藝ニ尓可久之許曽都可倍麻都良米伊夜
等保奈我尓十九三十九丁小千代累弥嗣継尓所知來流天
之日継等二十五十一丁小宇美能乃古能伊也都藝都藝尓
あど見え又發語より續けたるハ一(ヨ)十六丁小阿礼座師
神之盡樛木乃弥継ニ尓天下所知食之字或云二十食來九丁
小都賀乃樹乃弥継嗣尓玉葛絕事無六十丁小刀我乃樹
能弥継嗣尓萬代如是ニ知三三と有も皆上小同ド

〇元無男女一可絕継嗣士子大伴金村大連議曰

く世継の事を云あり仁明天皇承和十二年御紀に濱主本是伶人也時年一百十三自作此舞上表請舞長壽表中載和歌其詞曰那(十)世(一)都義乃美與尓萬和倍留毛(百)知萬利止(餘。十)遠乃於(十一)支奈能。萬飛多(舞)天萬川流(奉)。と有ハ七世を那ニ都義と云ふ(御代)ハ異ありて即古言の正格ある者あり孫(遠)ハ和名抄ハ比古と訓べし無萬古の無ハ字の音便あり最愛しむ義あり御紀の引る五世孫七世孫ハ若て字萬古ハ可美子の謂ホの孫字何方も美麻古と訓るハ美字萬古の略あるホて世ホ子の子を萬古と云ふ是あり比古ハ同義ホ曾孫を比ニ古と云ふ共ホ例の彦姫と對へる其ホ異ありて比ハ歷ホて子を歷たる子と云事比ニ古ハ子を歷て又子を歷たる子と云事ありて弥遠き謂あり

(空穂会社発行ホかも五部峻六部峻ニ傳流ある帯を云ふことも有り若て此五世孫と云ふ)

○天之萬根神此神の御事古事記ホ擦ホ須佐之男大神の御子八島士奴美神御在ニ坐て此を一世と云ふ二世ハ布波能毛遲久奴須奴神三世ハ深淵之水夜礼花神四世ハ淤美豆奴神五世ハ天之冬衣神六世ハ大國主神ホ一て此世數第一ニ一書ホ八島篠神を首ニ一て此神五世孫大國主神ある時ハ此も右の素戔嗚大神より大國主神まで摠て六世あり第二ニ一書ホも素戔嗚尊(中略)六世孫是曰大己貴命と見え姓氏録ホも素佐能雄命六世孫大國主神命と書されなれバ右の世數ホ於て次ホも疑を容るゝ所無くニて實ホ大國主

神の御父ゝ當〳〵せ給へれバ此ゝ五世孫天之菩根神
と有ゝ符合へりと云べし然れども傳二十三 二百七
二十四 三十ゝ論定たるゝが 一丁 十一丁
乃相與(青)遘合而生兒大已貴神と書されし古語拾遺ゝも
素戔嗚神娶國神女生大已貴神と所見なゝ是正說ゝ
して右の六世孫と云ハ決く中古ゝ出來れゝ杜撰ゟ
ゝ者ありけり若て其四世五世の間ゝ就ても其淤美
豆奴神ハ〳〵も出雲風土記ゝ謂ゆゝ八束水臣津野命
ゝして此素戔嗚大神の御事ゝあも渡〳〵せ給へりけ
れバ其御子(五世)天之冬衣神ハ〳〵も即此大神の御子ゟゝ

事著明ゝありけれバ必由ゝ所有むと考以く行くゝ神
名秘抄の古本ゝ天菩根神(亦名五十猛命)と有ゝ確證を得て
數年の大疑を一時ゝ氷解ゝ至れり然ゝハ此神叙を
得さ せ給へゝ後の御消息ハ正書ゝ(吾)何何敢私以安予
乃上(ニ)獻於天神也と見え此ゝも此不可以(ニ)吾私用也の
御言御在〳〵坐ゝも打置ずして直ゝ日神の御許ゝ奉ゟ(ら)
せ給へゝ語勢ありを以ても五世孫を何ゞ待せ給ふ
事の御在〳〵坐む然れバ此天之菩根神亦名五十猛神
を以て上奉〳〵せ給へゝ事ハ實ゝ然ゝ物ゝ〳〵其五世
孫と云三字ハ右の六世孫と云說の起れゝ後ゝ挽入

なりけむ事云も更なりけり此ハ古より以降其古事記の説有てより誰しも泥む事ハ有れどもも其ハ深く力を盡して見ざりけり故ハ其正意ハ得ざりけるを神代の御在しも其ハ深く力を盡して見ざりけり故ハ其正意ハ得ざりけるをもも其ハ深く力を盡して見ざりけり故ハ其正意ハ得ざりけるを孫を待せ給ふ事の御在しも此大神の私の御心御在しとも八見る可き迄さる至公の御心を匿しまゝ奉るが如く甚僻しまゝ説を立下ふ此一書を引て須佐之男命彼霊劔を五世孫ふ至て天ふハ奉給ふと云事疑ハしまゝ由ふ云れたるハ然すがふ大偉人ふてハ有けり故此天之菖根神と申奉るハ全く五十猛神の亦名ふ御在しまゝ坐べく所思るふ就て猶其上を考るふ此下ふ初五十猛神天降之時多將樹種而下然不殖韓地盡以持歸遂始自筑紫凡大八洲國之内莫不播殖而成青山焉所以稱五十猛命爲有功之神と有るハ

今又下ニ七十ふ注せるが如く此神を神名帳ふ曰至比古神ニ座有ツ其ハ頭木知ふ彦神の義ふ有り

此御名の五十猛神ハ唯御稜威の猛く高く御在しまゝ坐す意又古事記有功之神と申すハ其御功業を稱美奉れる義又古事記地神本紀等ふ大屋毘古神と申す御名の有ハ其屋作の事ふ御功坐る由ある歟こゝ有けれ右の如く樹種を播殖しまゝ給へる所由を以て負給へりしまゝ御名の御在しまゝ坐ずもゝふ理やハ有べき故此を以て思ふふ天之菖根神と申すハ天之殖木根神(アメノウエキネノカミ)と申す義ある可く天之冬衣神と申すハ天之殖木主神(アメノウエキヌシノカミ)申す義ふこゝハ有べきりけれ通證ふ延佳曰菖根神古事記所謂久々夜神神名帳山城國相樂郡和伎坐天乃

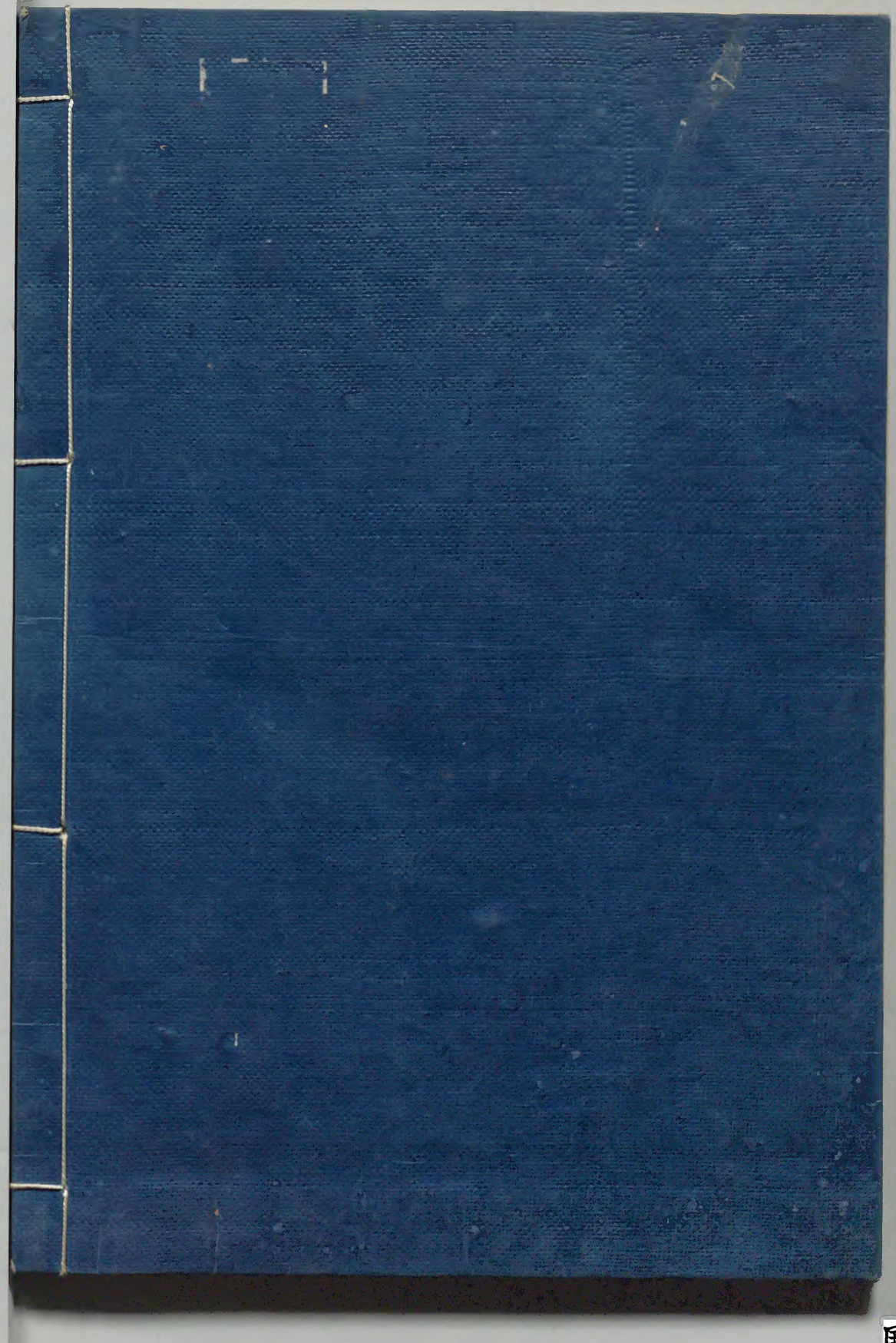
夫支賣神社大月次是也と云り若此説の如くあらむ
新嘗
あハ夫支ハ殖木ゐて賣ハ女神の謂ゐハ非ずして月
(ハ持ゐて月夜持海津持ちるが)
夜見尊又海童神ちどの義ゐ同じく殖木持の義ある
可きものや己ゐ傳二十三四十七丁ゐ注せるが如く式ゐ當
(也此ゐ由有)
郡綺原坐健伊那比賣神社御在し坐ハ更あり綴喜郡
太
樺井月神社大月次同郡月讀神社大月次と有る此二
新嘗
社ハ御父大神ゐ御在し坐あど由有げある御事共ゐ
ゐ清和天皇實録ゐ貞觀元年正月廿七日甲申奉授山
城國從五位下和伎神正五位下と見ゆ但此和支坐天
乃夫支賣神ハ
別神あるの考有ゐ記傳九卷五十八丁ゐ此ハ賣と
有ハ女神ゐても有べし此記ゐ天之吹男神と云も上
ゐ見えたり」と云れたるハ賣ゐ然る言ゐて若くハ其
天之吹男神の並びゐ天之吹女神と申すも御在し坐
つゝむを古事記ゐハゐて亡て神名式ゐ遺れるゐめり然
して其級長津彦命級長戸邊命の亦名ちるゐや然思
ゆる由ハ同年九月八日庚申山城國和伎神等遣使奉
幣爲風雨祈焉と有を始として臨時祭式祈雨神祭ハ
十五座の中ゐも和伎社一座と出たり斯れバ右の五
十猛神の亦名ある天之菖根神とハ別神と見ゆ猶後
人の定を二挨つ者あり　又傳二十六二百二
(落)
十二丁ゐ引る出雲風土記ゐ
島根郡山口鄉郡家正南四里二百九十八歩須佐能烏
命御子都留支日子命と申すハ此天之菖根神
負給と有る此都留支日子命と同神ゐして即五十猛神ゐ御在し坐べく所思ゆ其
敷坐山と云ハ同記ゐ謂ゆる布自枳美高山郡家正南

七里二百一十歩高二百七十丈周一十里有
ふ女岳郡家正南二百三十歩と有る是あり此山をー
も數坐と云ハ例の樹種を殖させ御在ーし坐て常宮の
地ヽト居ーせ給ふ由あ㆑可ーし若て此御名ついーも始
五十猛神ハーし少高天原より天降り御在ーし坐ける神
(御父大神と共ハふ)
あて渡ーせ給あが故か彼神叙を天神か奉ーせ給ふ
御使と爲て奉出ーし給へる其御功か依て負持坐る意
の御名ところハ所見たりけれ然れバ天之菩根神又
天之冬衣神と申すハ樹種を殖(させ給へ)る由か依て負坐る御
名都留伎比古命と申すハ彼神叙の御使とーして天上

小矢ふ上ーせ御在ーし坐ける謂ふて本より同神ふむ
渡ーせ給へりけ㆑但記傳九巻天之冬衣神の下ふ布
世登都流藝須恵布由紀傳歌ふ波加勢流多の知
称名ふて主ふ偖又黄泉段ふ十拳劔於後手布伎都
ここ有ふて彼菩根ふ通ふ由も著ーし根も上ふ云る如
く称名あれバ双と同ー意味ありと云われたる此ふて
ハ予が右の殖木根の説ハ立べうもぎろか
似たり然れども此ハ神叙を奉ーせ給ふ御使ところ
ハ御在ーし坐けれ御自其神叙を揮ハせ給ふ事の如何
てもハ御在ーし坐む且其六世の中ふても右の天之冬
衣神ハ唯叙を奉れるのみの御功あるもふハ大國主
神と御父子ふ取て甘ふい難○遣ハ奉出ありし章第三ノ一書ふ見也傳二
くてもも
十二　十ふ云り○上奉於天ハ私記ふ安米尓太弖万
津利安久と注せり正書ふ上獻於天神也と有る訓も

ふ又神名ふ越前國敦賀郡叙神社天村叙神社周防國佐波郡叙神社あと坐も同神名考合す可ーし

国書刊行会文庫 消印
帝室文庫

此か同じき事委しくハ傳二十三 二百五丁 か注るが如し
偖此天ハ右の如く天神か上奉させ給へるかて古事
記かハ故取此大刀思異物而白上於天照大御神也と
見え寛平縁起かも素戔嗚尊曰是神劔也何敢私秘藏
乎獻於天照大神也と右が如し然るを此か上奉於天
と書されたるハ(此かハ)其天神の御事をハ申さずして其御
在し坐す天上の事を以て云るあり此例多き事かて
万葉一十九ウ 〃 か上か山神乃奉御調等云云遊副川之神
毋云云と云て下か山川毋依氏奉流神乃御伐鴨と結
め又其反歌か(も)山川毛因而奉流神長柄云云と云る

明治七年七月十九日校了 筆改ム